

一般社団法人日本脊椎脊髄病学会
令和3年度第10回 理事会議事録

令和3年10月25日（月）20:00～22:10

浜松医科大学整形外科学教室

【出席した理事】伊東 学、大鳥精司、小田剛紀、川原範夫、西良浩一、田中信弘、
高相晶士、筑田博隆、千葉一裕、西田康太郎、根尾昌志、
長谷川和宏、波呂浩孝、松山幸弘、山田 宏、渡辺雅彦

【出席した監事】小澤浩司、小西宏昭

【議事の経過の要領及びその結果】

理事長・松山幸弘が議長となり、開会を宣して議事に入った。

理事長挨拶

盛沢山の議題だが、時間に配慮しつつ議論を尽くしたい。

審議・決議事項

1. 前回議事録の確認

前回議事録について確認を求めた。修正等ある場合は、渡辺理事へ一報する。

2. メンバーシップ・コンプライアンス委員会より：会員審査（9月分）

9月の入退会について全員を承認した。

3. 教育研修委員会より：第20回研修コース収支予算について

2022年JSSR学術集会時に開催される第20回研修コース収支予算について資料を示し内容を説明した。参加者の少ないⅡコースを取りやめたハイブリッド開催のプランを最終案とした。50%のソーシャルディスタンスのため広い会場が必要になり、約400万円学会補助金が必要であるが、予算内である。

一同検討の結果承認した。

4. データベース委員会より：進捗状況と登録率向上にむけての取り組み

JSSR-DBの進捗と登録率向上へ向けての取り組みを説明した。

11月1日のトライアル運用に向けて準備中であるが、2022年4月からはJSSR-DBのレジストリを通年化することを計画中である。現時点で指導医審査のときに200～300症例を提出し

ているが、2022年以降の審査から、JSSR-DBに登録された症例を用いることとしたい。ただ過渡期には全例が登録された症例でなくてよいと考えており、具体的な運用は指導医制度委員会で検討してほしい。

以上の筑田理事の発言に対し、その周知方法、具体的運用方法について多くの意見、質問が出された。また、評議員の新規・更新申請や専門医基幹研修施設認定に使うなどの提案もなされた。

最終的に4月から通年で運用する案について承認された。

5. 専門医制度委員会より基幹研修施設更新の審査について

専門医の更新期間・研修基幹の期間をともに5年にすることを提案し、JSSRの理事会だけでなくNSJにも了解を得た。5年のうちのどこか3年で100例の症例を出せればよいということになった。

別件として、内科・外科の二階の専門医は認められたにもかかわらず脊椎脊髄外科専門医は認められなかったことについて、この活動を続けていくのかを再検討すべきではないかとの意見がJSSRの重鎮からあった。

緊急にNSJの主要メンバー2名とJSSR2名で検討し、最終目標として今まで同様日本専門医機構（以下、機構）サブスペシャルティー認定を目指すことを確認した。2021年度も専門医機構からレビューシートの提出の依頼がくると思われる。JSSR、NSJ、JOAで協力して作成し、その後、機構に提出を行う。その後、JSSRとNSJの会員に脊椎脊髄外科専門医のこれまでの経緯を周知するために文書を作成し、両理事会で承認した後に、3つのホームページ（JSSR・NSJ・脊椎脊髄外科専門医）へ同一のメッセージを掲載し、総会でも会員に説明する予定としたいと提案した。

一同検討の結果、波呂理事の提案に賛同した。

また、8月23日にJSSRを含めた3学会で機構へ送った意見書に対する機構からの回答書が届いたとして、内容を提示し報告した。

機構の理事でもある大川評議員から専門医機構に対して意見書を出してもらっている。内容としては、機構認定のサブスペシャルティー専門医は2種類あるべきで、1つが現在認められている内科・外科関連のいわゆる1.5階建て部分の専門医、もう一つが脊椎脊髄外科専門医のような複数の学会を基盤とした専門医であるというものである。また、機構が間に入りマネジメントしないと、サブスペシャルティーの専門医はうまくいかなくなるだろうという内容で、JOAの多くの理事等から賛同を得られているということである。

これについて、小西監事からこの先どのような努力をすれば機構のサブスペシャルティー専門医として認められる可能性があるかとの問いが発せられた。波呂理事が、今回認められたのは内科・外科が基盤で、大病院で診療科として標ぼうされている割合が50%以上で

ある内科、外科に関連した1.5階建て部分の診療科に関連したサブスペシャリティ専門医であることを説明した。一方、脊椎脊髄外科については30%で、それゆえに認められなかったことを説明した。大川評議員の意見書なども併せてロビー活動も行い、2021年度レビューシートも粛々とこなしていくしかない。

松山理事長が、会員に説明して納得してもらいつつ、やるべきことはすべて対応していき、機構の考え方を変わってもらうしかないまとめた。

波呂理事が、専門医の基幹研修施設の更新審査について要項と案内を提示し説明した。

Webフォームからの申請方式になっているので、よろしくお願ひしたい。

6. NLの閲覧状況のアンケート調査内容について

前回理事会で提起したNLの閲覧状況のアンケート案を示した。何か意見があれば、渡辺理事まで。

7. 大正AWARD選考委員の件

中村雅也大正AWARD選考委員長から提案のあった次回の大正AWARD選考委員候補を提示し、一同承認した。

8. その他

・ 社保保険等システム検討委員会のアンケート（評議員への一斉メール配信）

2024年度新規・改正要望について評議員に対してアンケートを予定している。

回収率を高めるためNLではなく、社会保険等システム検討委員会名で一斉メールを2回ほど配信したい旨が述べられ、一同検討の結果、承認した。

・ JSR 編集委員会 『JSR』 査読者追加の件

『JSR』ではエディターが査読者振り分けに苦勞している現状がある。大御所の先生方に完成度の低い論文の査読は依頼しにくく、実際にそういった論文の査読を依頼できるアクティブな若手の先生はそう多くない。

査読者リストには上がっていないが、今までの『JSR』への投稿者の中でアクティブな若手を、ぜひ査読者リストに追加したい。これについて一同検討し、承認した。

また、以降は自動的に投稿者を査読者リストに追加していきたい。杏林舎からは今回は無料で協力するが、次回以降は1名システムに追加する業務につき300円との見積であった。一同検討の結果これについても承認した。

審議・報告事項

1. 社会保険等システム検討委員会報告

NSJ との連絡会議を 1 月 21 日に向けて調整中である。

ヒトトロンビン含有ゼラチン使用吸収性局所止血材（フロシール、サージフロー）の件では、全審会では評価が高く、スライド供与に応じたことや、議事録がすでに全国で共有されており、今後この基準が使用される予定であることを報告した。

また、1 年後に再度評議員にアンケートで改善度の調査を行う予定であると説明した。これについても一同検討の結果、承認した。

JSSR 学術集会に社保委員会からのスタディを発表するとともに『JSR』での論文化を予定している。渡辺理事が、第 51 回学術集会において JSSR 各委員会からの報告として、学会主導研究をまとめた特別枠を設けることになったので、その枠での発表をお願いしたいと発言し、大鳥理事が承知した。

2. 国際委員会報告

SPINE20 Partner Society Advisory Board (PAB)の議長に関する正式な打診に対して、具体的な業務を確認し、国際委員会で検討した結果、JSSR としてはインドネシア、インドとアジアの国で SPINE20 が開催される間は PAB の議長を受ける方針となったと報告し、一同承認した。

西良理事が、きちんと議事録等を残さないと、日本の企業から出資してもらえないので注意したほうが良いと意見を述べた。

2022 年度はインドネシアのバリで 8 月 NASS と ISS との合同ミーティングを行う予定である。今後の JSSR 内での SPINE20 関係の業務等の負担としては、2-3 名の現地会議への出席、オンライン会議への参加、旅費の負担（滞在費は開催国）などがあり、学会から年間 50 万円程度の支援が必要となる。千葉理事が予算計上してもらえば問題ないと発言した。

PAB は 3 年間の任期後 Executive board へ昇格はあるのか、PAB 議長終了時に JSSR に対して設立 4 団体に準じる優位性が認められるか等を確認し再度報告することになった。

3. プロジェクト委員会報告

各プロジェクトの進捗状況についてスライドをもとに説明した。各プロジェクトが順調に進んでおり、特に問題はないことを確認した。

4. 英文誌編集委員会報告

JSSR学術集会抄録を基にしたショートサマリー号の発刊について以下を報告した。

前回問題となった二重投稿への懸念については、

- 1) これから論文化する演題については許諾申請は不要である (ICMJE)。
- 2) すでに論文化されている演題については、研究の著作権が出版社や学会に渡ってしまっているため、ショートサマリー号を掲載する際にも許諾申請が必要となる。
とクリアできる可能性が高い。

しかし、ショートサマリー号発刊に対する費用対効果の問題が新たに出てきた。杏林舎から提示された概算費用は、予想を大きく上回る金額であり、委員会では一旦見送ることになった。その代わり「過去の学会の発表演題名のみを記載した PDF をリンクする」提案がなされ、その場合の見積もりははるかに安価であったため、この案を承認した。

5. 倫理委員会報告

前回理事会報告以降の倫理委員会の審査状況を報告した。また、倫理委員会規程の改定の審議中であることを報告した。

特定企業と関連する医療機器・医薬品の有効性・安全性の研究における利益相反については、研究を進める委員と企業、学会との間の COI 等センシティブな問題が絡むため、特に注意が必要であると喚起した。会社名なども研究計画書に明記されるため、COI 委員会にも審査に協力してもらい、研究書に記される関係者の COI を集める必要があると委員会内では結論づけた。ただ、COI を求める範囲は誰がどう決めるのかということも、今まで決まっていない。また学会としても計画書に記される企業から学会自体に資金提供を受けている場合、その企業の医療機器・医薬品の有効性・安全性の研究を行うのに問題はないだろうかと提起した。

様々な意見が出され、議論されたが、小田理事が、倫理委員会が「誰が COI を出すべきか」を決めるのはおかしいので、COI 委員会で範囲は決めてほしいと意見を述べ、川原理事が研究計画書等を COI 委員会へ渡してもらえればそのプロジェクトにおける COI 提出者を選定することを承知した。

6. 広報委員会報告

前回理事会以降に広報委員会で行ったホームページの更新業務について報告した。日整会のパンフレット原稿も鋭意委員会内で作成中である。

7. 指導医制度委員会報告

新規の指導医申請数を報告し、今後審査を開始予定であると説明した。更新の方は審査を終了したと報告した。

8. 新技術評価検証委員会報告

渡辺理事が、XLIF 症例数および各 WG の報告を行った。

A) 頚椎人工椎間板 WG

1 椎間の PMS は終了した。Prestige と Mobi-C の 2 椎間は PMS 中で、1 椎間、2 椎間合わせて 500 例以上が施行された。コロナの影響で大半は手術見学から動画講習に移行しているが、重大な合併症の報告はほとんど挙がって来っていない。

B) セメント注入型スクリュウWG

一般使用の拡大について、現在までの結果を見ると、20%にセメント漏出などがあり必ずしも安全とは考えられず、注意喚起した方が良い。

C) ACR・胸椎 XLIFWG(種市委員)

初期の合併症解析を行う予定。解析結果を踏まえて一般公開に向けて改めて WG で検討する。重篤な合併症例は初期の 1 例だけであるが、死亡事案でもあるので慎重に検討したい。

D) OLIF51WG

現在までに約 100 例に施行、合併症 5 例と順当に進んでいる。

E) 仙腸関節固定 WG

第 1 回目の WG を行い、エキスパートを招聘、意見聴取を行なった。安全普及に努め適正使用ガイドライン作成に向けて動いている。

2022 年 4 月以後の新技术各 DB 運用について

各レジストリの来年 4 月以後の運用について議論がなされた。JSSR DB は現行のレジストリを継続しながら JSSR DB にも登録開始することが望ましい。頰椎人工椎間板については 2022 年 4 月に JOANR-JSSR-DB に移行し現在のレジストリは終了する。OLIF51 は WG で再度検討する。ACR については現行のレジストリも継続する。

9. 学術集会プログラム検討委員会報告

2022年（第51回）学術集会は、パシフィコノースで10会場を使用予定で、企業共催は現状37である。コロナ禍も治まってきたため海外からも22名招待予定で、第3会場を英語メインの会場とする。ハイブリッドの可能性も視野に入れている。全員懇親会は難しそうだが、委員会では「賞の表彰は全員の前で行うのが望ましく、工夫して皆の前で表彰する時間を設けてほしい」との意見があった。

社保委員会の報告の際にもあった学会主導研究のセッションについては、90分枠を設けた。この枠で登録したい各委員会からの演題があれば、渡辺理事へ今月末までに連絡をお願いしたい。

2023年（第52回）学術集会については、コロナ対策だけではなく、2024年から始まる「働き方改革」も考慮し、開催形式はハイブリッドを考えている。国際化もより強く推進したい。

10. データベース委員会報告

決議事項にて審議済み。

11. COI委員会報告

川原理事が、2年に1度行っているCOIの調査であるが、今年は追加で夏に行い、6名から

前回の調査以降大きな変更があったとして申請があった。担当理事含め委員全員で確認を行ったところ、特に問題なかった。

12. 脊椎関連学会連携促進委員会報告

大鳥委員長が、秋にいくつかの学会をまとめて開催する場合、ある会社の概算ではかなり大幅なコストカットができるとのことであった。

13. その他の委員会報告

JSR編集委員会

2021年は現時点で53報の投稿があった。最近3年間で最も多く、採択率は78%であった。

また、『JOS』との二重投稿の疑いがある論文が『JSR』に掲載され、海外から指摘を受けた。この内容について本人の弁解も含め詳細が説明された。間違って投稿されたとされるJOS先行論文と同一の図表については差し替え予定ではあるが、嚴重注意となる。

用語委員会

用語集残部については、基幹研修施設と大学へ配布のうえ、それでも余った分はしばらく北里大学に置いて、次回の学会（横浜）会場に持参してフリーテイクにすることにした。

安全医療推進委員会

川口委員を中心に実施した「レベル確認のアンケート」について、次回の学術集会での発表を予定しているが、抄録の表現についても慎重を期したいとして、抄録原稿が提示された。松山理事長が、まずは安全医療推進委員会内で検討してほしいと依頼し、高相理事が承知した。

14. その他

2027年学術集会会長について

松山理事長より2027年学術集会会長について、検討事項が提示され、一同議論した。

以上

令和3年10月25日

一般社団法人日本脊椎脊髄病学会

議長 理事長 松山幸弘

監事 小澤浩司

監事 小西宏昭